

今、教師の授業力が問われている。私が初任の頃、授業力という言葉はなかったように思うが、この最近、教育書には必ずと言っていいほど教師力や学校力などと一緒に書かれている。何でもかんでも、〇〇力とする傾向はどうかと思うが、授業を創る力は教員であれば求めなければならない力である。中でも、子どもの主体的な学びをデザインする力量が強く求められている。それだけ、主体的な学びが注目されてきている反面、それには、子どもたちをどのように見取っていくかが非常に重要になる。

そこで、本会では、よりいっそう授業における子どもの事実や姿・成長に目を向けることにした。単純に子どもたちを一番知っているのは担任である。そのはずである。二番目は前担任か養護教諭であろうか。一番知らないのは校長かもしれない。そんなことはないという声が聞こえそうである。名前と顔を知っているのも知るであろう。ここで言う「知る」は、子どもの内面のことであり、思いや願いのレベルのことを言っている。

では、どのようにして内面を知るか。大変難しいことであるが、知ろうと努力しないかぎり見えてこないものである。まずは、授業を振り返ることが重要であろう。謙虚に自分の授業を省察してみよう。なんと情けない発問だろうと恥ずかしくなることも多いが、教師の行為に対する子どもの事実や姿に焦点をあててみたい。学習で発揮する力とそれを発揮する背景を考えたり、予想に反した活動の理由を考えたりして、子どもの学びを創りたいのである。学期に1度くらいは「今日の授業でA君はこんな考えをしていたので、明日はこんな発言をするだろう。」

「Bさんは、あの面積の求め方が分かっていなかったの、明日はこの問題と比較させ、つまずきの原因に気付かせよう。」など、自分の評価と子どもの見方や考え方、言動などのズレを記録したい。今の時代、簡便なのは、デジタルビデオに自分の授業を録画することである。それを文字にしていこう。実は、その作業の過程でA君が言いたいことや学習仲間とのつながりが分かってくる。面倒ではあるが一番有効と思う。

そういう私は、担任をしておらず子どもとかかわる時間がほとんどない。そこで、自主公開授業などで授業記録をとり、その時間の子どもの変容を見ている。右は、本校2年生の道徳の時間の前半の写真である。子どもの発言を添えて記録して、授業者と子どもの見取りについて話し合っている。これが今の自分の子ども「見取り力」の鍛え方である。(芝)



～略～、初発問が「どんなことを思った？心に残った？」で、たくさんの子どものカニの気持ちを言ってくれました。Kさんも帰りたい気持ちとつぶやき、Oさんも狭い所にいるからかわいそう。Fさんも寂しい、一人だからと理由も言ってくれました。Mさんの「今飼っているカエルなどもとの所に戻りたい気持ち」と言ったことに正直意外でした。とってもよく考えているなと思いました。

このあたりでカニの気持ちに終始してきたので、先生は「男の子の気持ちは？」と視点を変えられました。Fさん「捕まえられるうれしい。」Oさん「塩水を入れて、えさも入れてよかった。」Mさん「心配してくれた。」Sさん「カニの気持ちを考えてすごい。」と男の子の行為に目を向けさせました。これは、カニ自身の気持ちと男の気持ちを自然と比較することになり、有効な方法と思いました。そこで、先生の「じゃ、カニは幸せなんでは？」という学級の子どもたちが思っていることと違う揺さぶり発問は、さらに子どもの追究意欲に火をつけましたね。～略～